

一 般 演 題 抄 録

15. 悪性黒色腫患者における NSE の 経時的な変化について

佐伯光義 瀬口得二 織田知明
金梨花 佐藤浩子 楠田茂
山田秀和 吉田正己 手塚正
黒住望* 上石弘

近畿大学医学部皮膚科学教室・*同医学部附属病院形成外科

NSE は解糖系酵素の中で最も酸性を呈するアイソザイムで、神経系特異蛋白の一つである。この蛋白は、神経細胞や神経内分泌細胞等に存在し、また、これらの細胞に由来する種々の腫瘍に分布することにより、腫瘍マーカーとして利用されている。池川らも悪性黒色腫における NSE の血清濃度と免疫組織化学的検討を行っており、今回、我々は悪性黒色腫患者の血清 NSE の経時的な変動と免疫組織化学染色について検討した。血清 NSE 値の上昇は、患者13名中4名に認められた。その4名の患者は、10ng/ml 以上の高値をとって1カ月から

6カ月、平均3.5カ月で総て死亡し、NSE の変動は種々の治療に抵抗し上昇した。又、4名中3名が結節型黒色腫であった。免疫組織化学的に NSE は、検索可能な11名の患者において4名が陽性（うち1名は転移巣）となり、この患者のうち、3名が血清 NSE の上昇した患者と一致した。今回の結果から、原発巣での NSE 免疫組織化学染色陽性例では血清 NSE を測定することによって腫瘍の進展を予測するのに役立つ可能性が考えられた。さらに症例を重ねて検討する予定である。